

自身に対してであるということだった。生活が大変質素なことはお宅にうかがった時にその一端を拝見したし、これも噂だが、政府や国際機関の公務で海外に旅行する時は、最高レベルの旅費を受けても飛行機やホテルは低クラスのものしか利用せず、帰国後、余った額は必ず返却されたとか。

このような厳しい生活態度の反面、研究、教育を離れた場での先生はやさしい方だった。

このことに関連してひとつの小さな事実を思い出す。現在、先生と同じ環境問題の分野で活躍中のK教授は、これも学生仲間の話では、貧しくて工場で働いていた時、その才能を惜しんだ先生が彼に進学をすすめ、K氏は先生の経済的援助で大学を卒業できたという。常織的に考えれば、こういう師弟関係では、普通、弟子は師に対して二重に遠慮があるだろう。しかし、先生はK氏にひげ目を感じさせないよう心をくばっていたに違いない。K氏は、或る研究著作の「はしがき」の中で、世話になった多くの人々の名を挙げて謝意を表しているが、その最後を次の文章で結んでいる。

“… Finally, and most important, there is Gilbert F. White, teacher, adviser, and friend.”

中国の少数民族

内藤博夫

中国は漢民族が94%と圧倒的多数を占めている国であるが、55の少数民族を含む多民族国家である。ソ連には200近くの少数民族がいるという。これらの国々では国内諸民族の平和共存を実現することが国政の重要な課題となる。たまたま一昨年夏の夏と昨年暮れに中国を旅行し、少数民族の人たちと接する機会があったので、少数民族の問題についてふれてみたい。

一昨年の主な旅行先は中国の西域であったが、新疆ウイグル自治区のウルムチとトルファンでウイグル族の生活と文化の一端にふれることができた。都市・農村を問わず、要所要所に掲げられている各種のスローガンは中国語とウイグル語で書かれていたのが印象的だった。漢民族とトルコ系のウイグル族とは容貌によってある程度は区別することができたが、ウイグル族はカラフルな民族衣裳をまとっていたので見分けることは容易だった。中国人ガイドの説明では、中国で大問題になっている産児制限は少数民族には適用されていないということだった。当時、北京では全国人民代表大会が開かれており、1人っ子政策が決議されたと報道された直後だっただけに、中国政府の柔軟な政策に感心したりした。

昨年暮れの旅行は香港、広州、桂林を経て南寧に至るもので、桂林と南寧は広西チワン族自治区にある。この自治区最大の少数民族チワン族は中国全土に1,200万人、広西チワン族自治区内に1,100万人いるという。ちなみに西域最大の少数民族ウイグル族は550万人である。我々が訪れた南寧郊外の人民公社では、住民の8割はチワン族であるということだった。人民公社の概況説明に当たってくれた方もチワン族だったし、我々が訪問した農家の方もチワン族だった。この農家では75才の老婦人が応対してくれたが、この人は中国語がわからず、案内してくれた人民公社の方と我々一行の中国人通訳の2人による二重通訳で会話をかわすこととなった。この例からも明らかのように、少数民族とし

て認定されるためには人種的な差異だけでなく、生活習慣と文化の違い、とりわけ言語の違いが重要な条件になっているようである。チワン族は容貌の点で漢民族と似ている上に、漢民族と同じ中山服（日本人が人民服と呼んでいる中国独特の「国民服」。孫中山を記念した中山服という呼び方が正確らしい）を着用し、中年以下の人は中国語を話すので我々の目では漢民族と区別がつかなかった。人民公社が経営する病院を訪ねたとき、産児制限を奨励するポスターが目にとまった。チワン族はウイグル族と違って数が多いためか漢民族並みに扱われているわけである。さらに注目すべきことは、初等中等教育においてチワン語教育が行われていないことである。さきの老婦人の例が示すようにチワン語はチワン族の間でまだ生き続けている。しかし学校では北京語が教えられている以上、チワン語はいずれは消滅する運命にあるといえよう。革命後、チワン族には広西チワン族自治区の成立によって大幅な自治権が与えられることになった。しかし文化の面では漢民族への同化政策が適用されているように思われる。チワン族は独自の文字を持たなかった。おそらくこのことが漢民族の文化侵略を許した大きな要因になったのではないだろうか。ともあれ、日常生活の中で民族衣裝が姿を消してしまったのも同化政策の結果といえるかも知れない。広大な中国では少数民族政策にも地域差があるようである。

「いろり」のある風景

齋藤 功

ここ何年か日本各地の山村を研究仲間あるいは一人で歩く機会をえた。その際、囲炉裏をかこんでブナ帯の昔の生業についての興味ある話を聴く機会が何度かあった。もちろん、山深い村々にも経済第一主義の風潮がおしよせ、囲炉裏を中心とした山村の生活文化は消え去ろうとしている。かつて、柳田国男は山村から山村特有の特色が失なわれてゆく様相を「山村の農村化」とよんだが、今やわが国の山村には、山村の都会化が進んでいるのかもしれない。

囲炉裏を囲んで話す機会が減少しているのは、大学自体が高速度社会にまきこまれ、私自身のなかに、あるいは地理学者のなかにあった「ゆとり」が失なわれているからかもしれない。この「ゆとり」をもち続けているのが「文化人類学」と称している人達であろう。かつての人文地理学者と方法論的に何ら変らないことを研究している文化人類学が、大衆うけしているのは、この「ゆとり」のためであると思惟される。

ところで囲炉裏を囲んで話す機会が減少するにつれ、私のなかに囲炉裏のある風景がより確かなものとして定着しはじめた。それは、

燈火ちかく衣縫う母は
春の遊びの楽しさ語る
居並ぶ子供は指を折りつつ
日数かぞえて喜び勇む
囲炉裏火はとろとろ 外は吹雪